

診断あきた

◆発行 社団法人 中小企業診断協会 秋田県支部
〒010-0201 秋田県南秋田郡天王町天王字江川47-936
天王町商工会内
TEL. 018-878-2420 FAX. 018-878-2439
E-mail jsmeca05@ma3.justnet.ne.jp
ホームページアドレス <http://www.shindan-akita.com/>



平成17年3月30日

第14号

発刊!

＝平成16年度調査研究事業＝

『フィルムコミッションと地域振興に関する調査研究』報告書

当支部平成16年度の重点事業として取り組んで参りました「調査・研究事業」の報告書がこのほど完成、発刊の運びとなりました。第3回となる今回のテーマは『フィルムコミッションと地域振興に関する調査研究』。全78ページにわたって、アンケート結果を交えた提言としました。

会員・関係先へ贈呈し、各方面よりご好評をいただいています。

平成16年度マスターセンター補助事業

フィルムコミッションと地域振興に関する調査研究

報告書

平成17年1月

社団法人 中小企業診断協会 秋田県支部

各章は次のとおりです。

第1章 フィルムコミッションとは

1. ロケ撮影誘致による地域への効果
2. アメリカから始まったフィルムコミッション
3. 急速に増加する国内フィルムコミッション

第2章 フィルムコミッションの現状と課題

1. FCサイドの認識している効果と課題
2. 制作サイドの考えているロケ地決定の要素とFCへの要望
3. FCサイドと制作サイドのアンケート比較

第3章 秋田県内におけるフィルムコミッションへの取り組み

1. かくのたてフィルムコミッション
2. 釣りバカ日誌15秋田ロケの事例
3. 秋田フィルムコミッション研究会とあきた映画ネットワーク

第4章 フィルムコミッションを活用した地域振興の提言

1. 映像発信による地域ブランドの確立
2. 秋田にもっとフィルムコミッションを
3. 競争時代を勝ち抜くフィルムコミッション戦略

【データ編】

《 調査・研究事業委員会 》



委員長 工藤 義和
委員 荒牧 敦郎
委員 佐藤 直伸
委員 柴田 敬二
委員 富野 忠雄
委員 成田 広樹
委員 畠山 俊彦
委員 樋口 清行
委員 堀 辰生
委員 村上 明



平成16年度 活動の軌跡

理事会

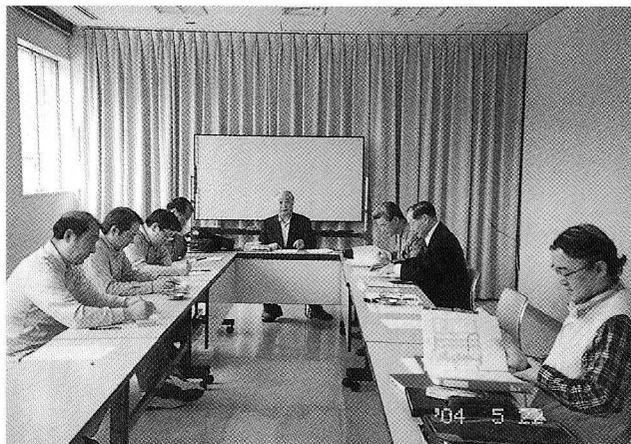
第1回支部役員会が平成16年5月22日に、秋田テルサを会場に開催されました。

議題は「平成16年度通常総会への提出議案について」。通常総会上程議案について内容を討議し、原案どおり総会に上程することが承認されました。

このほか、中小企業診断士と診断協会のPRについて意見交換を行い、無料経営相談会の開催、地元金融機関との連携、支部ホームページの活用、官公庁・学校・関連団体へのPRなどのアイデアが出されました。

その後も数回にわたり役員会が開催されました。今年度は中小企業診断協会創立50周年という記念すべき年に当たるため、秋田県支部でも単独で記念事業を開催することを決定。秋の事業実施に向けて細かい打ち合わせを重ねました。

また「調査・研究事業」は委員全体を二つの班編成とし、各々の班が隔年で事業に取り組む体制となりました。毎年の恒例事業に加えて、記念事業と調査・研究事業が同時に走ることになり、忙しい一年となりました。



通常総会



平成16年5月29日（土）秋田市の平安閣を会場に、通常総会が開催されました。

第1号議案 平成15年度事業及び決算報告承認に関する件

第2号議案 平成16年度事業計画及び予算承認に関する件

第3号議案 支部規約の一部改定に関する件

以上3つの議案が、いずれも満場一致で可決承認されました。今年度の事業計画として、「調査・研究事業」と「協会創立50周年記念事業」に重点的に取り組むことが決議されました。

また支部規約の一部改定が承認され、年度の途中で入会した会員は、会費を月割計算で納付することができるようになりました。

総会終了後は懇親会が開かれ、今年度の活動やお互いの近況について話の花が咲きました。

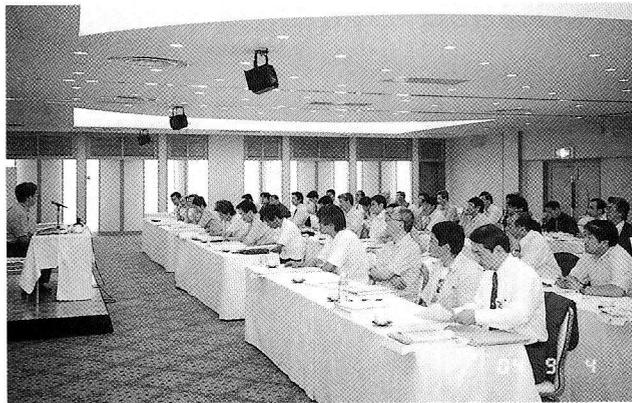
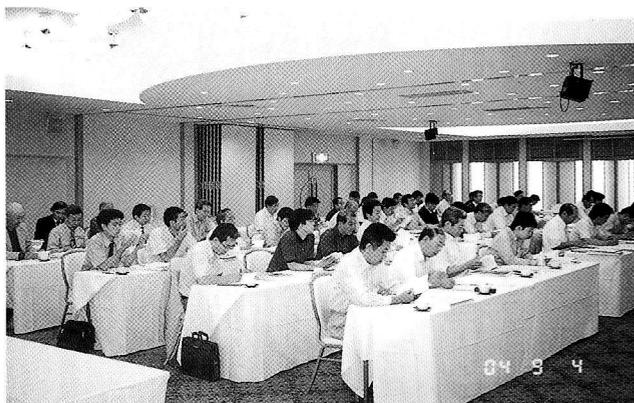


理論政策更新研修会

平成16年9月4日（土）平安閣を会場に、理論政策更新研修会が開催されました。

今年度の参加者は、北は札幌から佐々木会員、南は東京から佐藤会員に参加していただき、過去最多の54名となりました。

講師は、秋田県産業経済労働部次長の佐藤文一氏、中小企業診断士の鹿倉勝巳氏のお二人にお願いしました。



<佐藤文一氏>

「中小企業関連施策の概要」「平成16年度の国の中小企業施策」「秋田県における中小企業施策の今後の方向」「平成17年度の国の中小企業施策の方向」といったテーマで、施策全般から秋田県の現状と課題まで総括的な説明をしていただきました。

長崎県出身、フランスやベルギーなど豊富な海外経験をお持ちの方で、中小企業の活性化を通じた「産業が力強く前進する秋田」づくりについてエネルギーに語っていただきました。



<鹿倉勝巳氏>

最近よく耳にするようになった「コミュニティビジネス」という言葉。地域コミュニティを基点として、住民が主体となり、顔の見える関係のなかで営まれる事業のことをいいます。

今日地域では、少子・高齢化、中心市街地の空洞化、住宅・福祉・環境問題などの問題を抱えています。これら多様な地域課題は、従来の行政の枠組みだけで解決するのは困難であり、地域住民が主体となり、既存商店街も一緒になって地域コミュニティ活動に取り組んで行かなければなりません。

永年コミュニティビジネスに携わって来た講師の具体的経験談から、中小企業診断士には、客観的な立場でビジネスをサポートする役割が期待されていることが力説されました。



<情報交換会>

今年も遠路東京支部より駆けつけていただいた佐藤会員の乾杯の発声とともに、情報交換会が開催されました。

講師のお二人にも参加いただき、さらに突っ込んだ情報交換をすることができました。



協会創立50周年記念事業 ～ぶらんど戦略研究発表会～

中小企業診断協会は、昭和29年（1954年）中小企業庁の指導のもとに設立され、平成16年10月に創立50周年を迎えました。

秋田県支部においてもこれに合わせて記念事業を実施すべく、「協会創立50周年支部記念事業実行委員会」を設置して準備を重ね、平成16年11月6日（土）秋田市のみずほ苑において記念事業を開催しました。



記念事業のテーマとした「ぶらんど戦略」は、平成14年度に実施した調査・研究事業で採り上げたテーマです。冒頭で、当時の研究事業委員長を努められた佐藤幸治会員から、報告書完成に至るまでの経過説明がなされました。その後、取材にご協力いただいた9社の中から、当日ご都合のついた2社の代表の方にブランド作りにつまわるエピソードなどを語っていただきました。



<秋田比内や(株) 柳澤正彦氏>

秋田が世界に誇る「放し飼い比内地鶏」を日本で初めて比内地鶏専門店という形で全国展開するに至る、創業時から現在までの経緯をお話いただきました。

生産から加工、流通まで比内地鶏を中心に秋田の本物の地場産品を、秋田の食文化とともに全国各地に届けている当社。持参されたサンプル商品、チラシ、パンフレット、手作り情報紙のいずれもが洗練されたものでした。

近年注目されて来たのが「スローフード」という考え方。飼育に時間がかかる比内地鶏は、この時流にピッタリと乗っています。これからも徹底して「秋田」にこだわり続けながら、事業拡大の夢は無限に広がっている柳澤氏でした。

<林泉堂(株) 林 博資氏>

モンドセレクションで4年連続金賞受賞という輝かしい栄誉を続けているのは、十文字町の林泉堂の「秋田比内地鶏ラーメン」です。このほかにも2004年大金賞に輝いた製品が「特別製造十文字ラーメン」「冷麺」「玄挽きそば」「稲庭本生うどん」と目白押し。

林氏は、温和で落ち着いた口調ながら、幼少の頃の苦勞話に始まり、国際的評価を受けるまでの経過を力強く語っていただきました。

<パネルディスカッション>

引き続き当支部荒牧会員のコーディネートにより、パネルディスカッションを開催しました。フロアからの質問に答えながら、時代と顧客と共に変化し、前進を続けることの大切さが語られました。



<情報交換会>

工藤副支部長の挨拶に始まり、講師のお二人、お二人に関連する企業や団体の方々も交えて、情報交換会を行いました。

『ブランドは一日にして成らず・・・』。作り上げるのに相当の苦勞をし、維持するにも大変なモノですが、重要性の認識が改めてできました。

<新聞へも掲載>

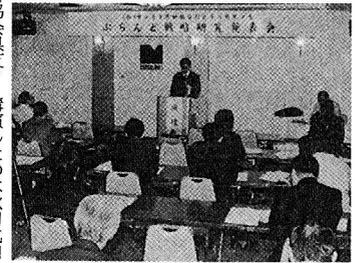
地元魁新聞朝刊に50周年記念事業の様子が掲載されました。



ブランド戦略を探る

秋田市で講演会

会社経営者ら40人出席



中小企業診断協会県支部(本間良一支部長)は六日、「中小企業のブランド戦略」をテーマとした講演会を秋田市のみずほ苑で開き、食材へのこだわりや積極的な商品開発の必要性について再確認した。写真。

講演したのは秋田比内町(鹿角市)の柳澤正彦専務と、林泉堂(十文字町)の林博樹専務。柳澤専務は「比内地鶏は長い間、きりたんぼ用のだし汁として利用されてきたが、その食味の素晴らし

さから焼き鳥用に加工出荷することを思いついた」と説明。「ブランドを守るには徹底して食材にこだわるのが大切。世界に目を向けながら、本県特有のいい素材を生かしてほしい」と語った。

また、林専務は「国際的コンクールに積極的に挑戦するなど、商品開発に力を入れている。ナンヨナルブランドの確立が目標」と強調。「バブル崩壊後の不況下で、どんな新商品を販売したことが功を奏した。攻めの姿勢を忘れないことが大

切」と述べた。同支部の設立五十年記念事業の一環で、会員や会社経営者など四十人が出席。十四年度から「県内企業のブランド戦略に関する調査」を実施して、今回の二社を選び、戦略を広く知ってもらおうと企画した。

新入会員プロフィール紹介

今年度の新入会員をご紹介します。掲載項目は以下のとおりです。

- ①登録番号 ②生年月日(年齢) ③自宅住所 ④自宅電話 ⑤Eメールアドレス
- ⑥勤務先 ⑦勤務先住所 ⑧勤務先電話・FAX ⑨主な研究テーマ ⑩趣味・特技
- ⑪『好きな言葉・座右の銘』

春原俊彦

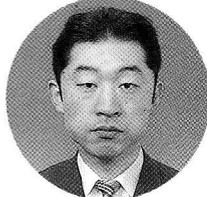


- ① 11575
- ② 昭和28年7月21日(51才)
- ③ 〒010-0871

秋田市千秋中島町3-35-601

- ④ TEL・FAX (018-836-4325)
- ⑥ 中小企業金融公庫 秋田支店 支店長
- ⑦ 〒010-0001 秋田市中通2-3-8
秋田アトリオンビル10階
- ⑧ TEL(018-832-5511) FAX(018-835-6331)
- ⑨ 経営資源を活かした経営革新、財務戦略
- ⑩ 山歩き、古刹探訪
- ⑪ 『人間到る処青山有り』

小池徹也



- ① 402580
- ② 昭和46年5月12日(33才)
- ③ 〒010-1435

秋田市仁井田潟中町5-13

- ④ TEL(090-3127-2832)
- ⑤ tetukoie@hotmail.com
- ⑥ 株北都銀行 営業サポート部
- ⑦ 〒010-8677 秋田市中通3-1-41
- ⑧ TEL(018-833-4211) FAX(018-835-7030)
- ⑨ 企業価値評価、M&A
- ⑩ 読書、釣り
- ⑪ 『温故知新』

支部研修会 ～農家民宿「果夢園」の夢と挑戦～



平成16年11月27日（土）平安閣を会場に、支部研修会が開催されました。

今回は、14年度の調査・研究事業であるブランド戦略で取材にご協力いただいた館岡氏にお願いし、農家民宿への取り組みとグリーン・ツーリズムについて、お話を聞きました。



そもそもは母のヨーロッパ研修に端を発した「農家民宿」は2000年7月にオープン。秋田県内ではグリーン・ツーリズムの先駆者的存在です。講演のあとは、当支部の荒牧会員をコーディネーターに、フロアとの質疑応答も行われました。先進地イタリアを視察した経験をもとに、心のこもった事業を続けられていることが、講演の話ぶりから伺えました。



例年になく個数が上陸した台風のため、果樹の80%が落下するなど甚大な被害を受けたとのこと。青森県と比べて果樹の加工品が少ない本県の実態を踏まえながらも、常に前向きに考え行動しようとしている姿が印象的だった館岡さん。研修会終了後の情報交換会にも引き続きご参加いただきました。

農業をやっている母親を見て始めた事業ですが、経済的にはまだまだ楽とは言えない状態にあるとのこと。夢は「もっと経済力をつけて」「家族でのんびり、ゆっくり、楽しみながらやれる農業」にすること。エコ、ナチュラル、アグリに溢れた研修会となりました。

寄稿



『カラスの 勝手許さず』

支部会員 亀谷 寛

古希と病後の無精で足腰てきめんによわった。遅まきながら足腰の衰えをカバーしようと、家の周りを散歩することを心掛けている。

秋田県の南部沿岸に位置するわが町「仁賀保」の永年の懸案だった駅前通の道路拡幅とJR駅舎の新築が数年前に整備完了した。街が少しは小綺麗になった。ところが車社会の例に漏れず郊外に若者の中心街が出来た。旧来の駅通りは人通り少なく商店も寂れ、森閑とした高齢者の街となった。僅かに銀行とお菓子やが駅前に進出した事で多少賑わいを取り戻し、何とか面目を保っているのが現状である。

駅前ロータリーも田舎町の事とて、バス・タクシー停わずかばかりの駐輪場・駐車場などがある程度で、域外のわが家からロータリー一周でわずか300メートル足らずの散歩コースである。朝晩の散歩で注意するのが頭上電線のカラスと路上ふんの公害である。屋外駐車の車は、白っぽいカラスのふんで毎日洗車をしいられた。

季節のせい最近電線に鈴なりとなっていたカラス軍団を見かけない。カラス軍団はさながらにヒッチコック映画の「鳥」である。不吉な黒服と不気味な鳴き声にはうんざりであった。それでも、はぐれカラスか地元のカラスか数羽朝晩見かける。

朝晩の散歩には野球帽が必需品であった。この帽子がカラスふん公害対策である。また足元はふんを踏まないように注意を払いながらの散歩であった。利口なカラス退治に音、色、遮光、磁力、電磁波、果てはかすみ網で一網打尽にして試食で全国から響きをかかった町などもあった。しかしいずれもカラスの学習効果著しく、カラス退治の決定打として今一の様子である。

我が町は風力発電15基も稼働する「風の町」でもある。東北電力の若い頭脳を持ち主のアイデアか「風車と有刺鉄線」対策である。小型風車はコンクリート製トランス電柱天辺に風速計みたいな黄色いスプーン4翼型風車が4基取り付けられた。同時に電線には避雷針まがいの有刺鉄線が20個ほど取り付けられた。銀行角の電柱に設置されたのは一昨年晩秋のことである。小型風車は微風でも常に回転し、強風では速度コ

ントロールなしで猛烈な勢いで回る。速度制御なし色付き風車と有刺鉄線策のいずれがカラス退治効果あるのか相乗効果なのか不明である。

カラスは物理的「力」に弱いのか、カラス軍団のかしらの意思決定か、この電柱電線にカラスが寄り付かない。今のところ天と地のカラスふん公害一掃である。このテストは年次スパン要するのか、他の電柱電源に波及していない。

「カラスの勝手」の暴力退治に絶大な効果のある「風」の暴力で対処する風車・有刺鉄線、「目には目」の電力会社のユニークなアイデアを応援しよう。



『アテネオリンピックを見て』

北都銀行 人事部

佐々木 正 記

競泳女子800メートル自由形の柴田亜衣の逆転金メダルは本当に驚いた。日本人が自由形で金メダルを取るのは無理だと思っていただけに、本人には失礼だが、神風が吹いたと思った。

体操男子団体の最終種目の鉄棒で、ルーマニアとアメリカが金メダルの重圧でミスが続く中、あくまでも「攻め」の演技を貫いて逆転金メダルを取った日本選手の姿勢にも恐れ入った。また、それを素直にたたえたアメリカとルーマニアに選手達もすがすがしかった。

感動的なシーンも多かった。

女子レスリングでは、浜口京子が採点表示が違っていたことを知らずに準決勝で敗退したとき、父親のアニマル浜口が審判に「(採点表示が) 違うよ！違うよ！」と必死に叫ぶ姿。

頭を上下に動かす独特の力強い走りを見せていた女子マラソンの女王ラドクリフが、36キロ地点でよもやの棄権をして泣き出す姿。

男子ハンマー投げで金メダルのアヌシュ選手がドーピング失格となり、繰上げ金メダルとなった室伏が記者会見の席上、硬い表情で「金メダルより重要なことがある」と語った姿。

中でも、忘れられないのが男子マラソンだった。37キロまで独走でトップを走っていたブラジルのデ・リマ選手が、心無い一人の男に走るのを妨害され、歩道に押しやられるという本当に気の毒な事件に見舞われた。まわりの観衆に助けられ、再び走り出したが、元の走りは戻らず、後ろの二人の選手に追い抜かれてしまう。

「あのことが無ければ・・・」と悔しい思いをしているに違いない。そう思っていた私だが、銅メダルのゴールまであと100メートルというところで、デ・リマ選手が信じられない行動を取った。うれしそうに両手を横に広げ、まるで子供が飛行機になったようにトラックを蛇行して走り出したのだ。

「この人はアクシデントへの怒りや恨みなど考えず、銅メダルを素直に喜んでいる。」その事実に感動した。スタンドの観衆も、アクシデントのことをよくわかっていただけに、更に大きな拍手が贈られた。そのシーンはわずか5秒程度だったが、私は忘れられないし、すごく考えさせられた場面であった。

レース後のデ・リマ選手の会見を記しておく。

「事件の後はレースに集中することができなくなった。最後まで走り切るのは非常に困難だった。(それでも)オリンピック精神を見せて、メダルを勝ち取ったんだ。(中略)僕はメダルを取れて満足している。こうして今、この瞬間を味わうことができるのは、厳しいトレーニングの成果だ。トレーニングも順調だったし、メダルを取れると思っていたよ。目標を達成したんだ。何が起こっても、このメダル会見の壇上にいることをうれしく思うよ。」



『おばあちゃん原宿』

北都銀行 審査部
佐瀬道則

いつもは最新の商業施設を目指して一目散に駆け寄り、寸暇を惜しんで隅々まで覗き回るのが、その日ばかりは何故か別のところへ足が向いていた。

少子高齢化、商店街の空洞化、中小小売業の疲弊、時代を語るときに必ずといっていいほど出て来る言葉である。しかし、そこには全くあてはまらなかった。

東京都豊島区巣鴨。初めての街なのに、山手線の駅を降りれば目的地への道案内は必要なかった。電車を降りた人の大部分が、大きな流れとなって一定の方向へ歩いており、私はただその流れに乗るだけで済んだからである。ただ、その人の流れはほぼ100%が私より年齢が上である、しかも女性が多い。

ちょっとキツメのパーマをかけ(帽子を被っている人も多いが)、ジャンパーにズボン、肩から実用的なポシェットをかけている。これが典型的な「巣鴨スタイル」とでもいうべきか。



商店街の入り口に大きなモニュメントアーケードがあり「巣鴨地蔵通商店街」と大書されている。その支柱の足元に、白装束に身を包んだ片腕のない人が、怪しげな音楽を流しながら正座して頭を垂れている。昔よく目にした「傷痍軍人さん」である。

商店街は歩行者天国となっており、一步足を踏み入れれば、もはや押すな押すなの満員電車状態となる。和服・洋服・バッグ・靴・お茶・団子などなど、とにかく年寄り喜びそうな商品・陳列・接客が溢れ、異様な活況を呈している。

ほどなく一層の人だかりとなっている一角にたどり着いた。「万頂山高岩寺」通称「巣鴨とげぬき地蔵」である。境内には露店商の威勢のいい声が響き渡り、人の流れは行列となって一時ストップする。水洗い観音へお参りする行列である。「自分の痛いところや悪いところを洗う」といわれるが、観察しているとほとんどの人が頭から順番に通りに洗っているようである。やはり全身万遍なく健康でありたいということか。



いつ頃からか、この通りは「おばあちゃん原宿」と呼ばれるようになった。原宿竹下通りが若者で埋め尽くされるのとの対比であるが、現場を目の当たりにするとある意味で感動的である。とにかく年寄り達の表情が明るく生き生きしている。団子を1本買ってはおぼりながら、露天商をからかい、店を冷やかして歩く。実に楽しそうなのである。

たまたま行った日が「四」のつく市日だったせいもあるが、正直、あのパワーには驚かされた。高齢化社会の明るい未来を見る思いであった。